

具足を強調している。自力他力と三心の関係が最も明確に現れている文は『具三心義』巻下にある。

正行具^ニ三心^ニ其理必然就^ル雜行^ニ一案^ニ之^ニ自利^ニ真実^ニ中余行^又具^ニ三心^ニ無疑^ニ唯所嫌^ニ
者未^レ發^ニ真実心^ニ時^ニ自力^ニ之行^也深^ニ心^ニ之中^ニ云^ニ若行^後雜行^{回向}得生^ニ此^即指^ニ上^ニ自利^ニ真実^ニ
中余行^也回向^ニ他力^ニ之時^ニ諸行^皆歸^ニ本願^ニ無^ニ不^ニ往生^ニ

〔法然門下の教字〕
附録一五二頁

というように真実心を発さないときを自力の行と言い、諸行を他力に回向したときに往生疑いなしと言うのである。明らかに三心の具足していない行を自力の行と言い、三心具足の行を他力の行と言っているのである。

第十項 まとめ

以上見てきたように、隆寛は三心具足の念仏を本願の念仏と言い、あるいは他力の念仏と言うように往生の正因としての三心を強調するのである。また三福を修している人を本願行^{えいげう}に回入させるために三心が説かれたとして、本願行以外を修している人も三心を発すことで往生できると言うのである。これは隆寛が長い間勉強してきた天台や他の行を土台にして回

向することによって救われようとした意図が見られる。隆寛は高齡にして法然門下に入ったが、それまでの行を自力の空しい徒勞の行と位置付け、自己の体験から他の自力の行者に、浄土教の真髓を三心を通して知らしめようとしたのではあるまいか。

隆寛の著作のうち和語で書かれているものについては、特に散心の凡夫の救済として他方に帰すことが強調され、また一念義を批判したような形で、阿弥陀仏に帰したからには一称毎の念仏の功德を喜びますます多くの念仏を相続することの大切さが説かれている（『続浄九、四六頁』）。

仏の本願に出会って本当の意味での真実を知り、すべての善を往生のために回向し、その想いを継承させていくという生き方を提案しているであろう。また隆寛は三心を発したあとにはどの機も全く差別がなく往生できると言い（『隆全』一、八四頁）、三心を発することによって自然に戒行まで具わる（『隆全』一、一一三頁）と言うほど三心の有り難さを強調するのである。

法然は選擇思想をもって信の確立を求めたが、隆寛は弥陀の願への回入によって自らの信を確立したことがその著作から推察される。もちろんその回入の前提としては聖道門の仏教を深く学び行じていなければならない。法然は回心によって過去を捨てたと言われるが、隆寛にとつて過去はあまりにも長かったのかもしれない。